

森岡成好 茶碗展



GALLERY
うつわノート

刷毛目茶碗 口径 145mm 高さ 87mm

2017年9月23日(金)～10月1日(日) 会期中無休



南蛮焼茶碗
口径 145mm 高さ 82mm



灰釉茶碗
口径 135mm 高さ 65mm



八重山土焼茶碗
口径 117mm 高さ 83mm



鉄釉茶碗
口径 146mm 高さ 63mm



粉引茶碗
口径 132mm 高さ 92mm



引出し黒茶碗
口径 125mm 高さ 87mm



灰釉茶碗
口径 140mm 高さ 72mm



焼丸茶碗
口径 122mm 高さ 85mm

料金後納
ゆうメール

「うつわ」の美しさを語るうえで、かつて茶人が創造した美意識は偉大であり、陶芸家にとって今も「茶碗」が特別な存在であることは間違いないのですが、それを正統に受け継ぎ茶の湯の世界と繋がることを願う作り手もいれば、そこに取り巻く権威を忌避し、敢えて距離を保つ作り手も存在します。

和歌山県の高野山の麓で暮らす森岡成好さん。1948年生れの69歳。大御所といっても過言ではないご年齢ですが、尊大な態度は一切なく、日々実直に器づくりに向き合い、多くの人に慕われる大人物です。

森岡さんが焼き物を始めた1970年代頃の陶芸家が目指すべきは、崇高な茶碗が主題でした。当時、食器は「雑器」と呼ばれ、陶芸家にとって「その他」扱いだった時代です。そのような時から一般庶民が使う暮らしの器を作ってきました。代表する器は南蛮焼メですが、それは元々南方の名もなき工人が暮らしの器として作り続けてきたもの。これを選ぶことは即ち、陶芸界のヒエラルキーに属さず、人々の暮らしに通じる器を貫ぬく姿勢の表れなのです。

しかし茶の世界と距離を取りながらも、茶碗を作ってきた訳ではありません。森岡さん自身、昔の茶人が見出した茶碗には大いに感化され、その美しさに近づくために長年取り組んでいます。ただ自作の発表時には敢えて茶碗とは名乗らず、単に「碗」または「わん」と称し、茶碗にも使える暮らしの器であるとしてきました。日常の中にある謙虚な美しさ。それは権威ある茶碗として取り上げられる以前の本来の姿に近いもの。特殊な流通におもねない健やかな「わん」。それが森岡さんの茶碗なのです。

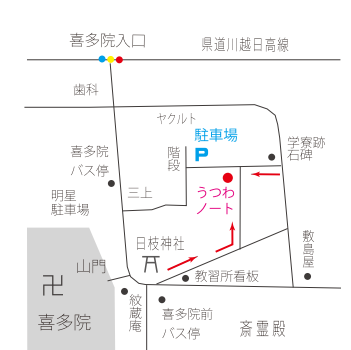
斯様に森岡さんは、特段区別することなく作っている訳ですが、今回敢えて「茶碗」というタイトルで森岡さんの仕事を括る展示会を企画したく思いました。それは歴代に残る「茶碗」に通じる美的価値を有しており、また実用としても申し分のないもの。それを定型化した言葉のもとで、その意味を明らかにしてみたいと思うのです。

焼メはもちろんのこと、灰釉、粉引、刷毛目、鉄砂の碗が、150点ほど並びます。お値段は一万五千円から一万八千円の範囲。森岡さんのご実績からすれば、健やかな価格帯であり、大らかな造形の魅力と共に人物そのものを表していると思います。茶碗の他には、厳選した壺、花入、皿、鉢などの器が並びます。

従来より森岡さんの器を支持されている方はもちろんですが、今回は茶の世界に通じた方、茶道具に関心のある方にも触れて頂きたいと思っております。どうぞこの貴重な機会にご来店頂ければ幸いです。

店主

ギャラリー うつわノート
埼玉県川越市小仙波町1-7-6
TEL: 049-298-8715
MAIL: utsuwanote@gmail.com



電車：川越駅(東武東上線・JR)より徒歩25分
本川越駅(西武新宿線)より徒歩20分
バス：駅東口3番乗場 [小江戸名所めぐり] ~ [喜多院前]
駅西口2番乗場 [小江戸巡回バス] ~ [喜多院]
車：ギャラリー専用駐車場は北側(5~8番)

2017年 1月30日 現在、和歌山県かつらぎ町にて制作
1997年 和歌山県天野に窯窯
1994年 米国で映画製作技術を学ぶ
1994年 奈良県生まれ
森岡成好 略歴



森岡成好 茶碗展

二〇一七年九月二十三日(土) ~ 十月一日(日) 会期中無休
営業時間 十一時 ~ 十八時 作家在廊日 九月二十三日(土)・二十四日(日)



灰釉茶碗
口径 132mm 高さ 60mm



鉄砂茶碗
口径 140mm 高さ 95mm



粉引茶碗
口径 146mm 高さ 95mm



灰釉茶碗
口径 143mm 高さ 76mm



灰釉茶碗
口径 145mm 高さ 81mm



灰釉筒茶碗
口径 110mm 高さ 106mm



南蛮焼メ茶碗
口径 138mm 高さ 70mm



灰釉茶碗
口径 140mm 高さ 82mm